

漢詩文「松屋十八景記」に詠まれた景観の都市空間分析と考察

漢詩文に詠まれた「景観」を都市空間に展開する試み #2

正会員 ○目山直樹 1*
正会員 谷本圭司 2**
準会員 村上日向子 3***

漢詩文 松屋十八景 毛利元次
視点場 都市空間 都市景観

1. 研究の目的と方法

1.1 研究の目的と方法

(1) 研究全体の目的

本研究は、近世大名、徳山毛利家第3代、毛利元次が命じて、宝永3年(1706)に刊行した『徳山名勝』¹⁾に収録されている「松屋十八景記」に着目し、毛利元次が選んだ十八の徳山の名勝(4字の漢文題、景題)を、家臣桂方直が文章として記したものをもとに、「景観」として読み解き、都市空間(地図上)に展開することを試みた。

今回、2報にわたって発表する研究の全体的な目的は、「漢詩文」に詠まれた風景を読み解き、平面・立面の2次元で説明・分析するとともに、さらに、3次元の都市空間に展開するための分析手法を検討することである。

(2) 本稿の目的

本稿では、第1報に引き続き、「松屋十八景」に詠まれた風景を、視点場から対象物に対する平面分析、同じく高低差の分析、平面・立面の位置情報に基づく3次元の図化までを試みることを目的としている。

都市空間上、すなわち、地図上に展開する試みを行い、得られた知見をもとに今後の課題を整理する。以上をふまえ、本稿の目的を以下のように設定する。1)から3)までを第1報で対応したので、ここでは、項目は4)から7)までを設定する。

- 4) 「松屋十八景記」の配列に基づく対象物の視線誘導の順序
- 5) 対象物の平面上の位置から見た視点場からの角度の分析と考察
- 6) 対象物の視点場からの高低差や視覚内に入るか否かの分析と考察
- 7) 平面・立面の位置情報にもとづく3次元地図への展開の試み

1.2 研究の方法

(1) 漢詩文対象を図上にプロットする

国土地理院の地図³⁾を使用して、視点場であると推測される松屋と十八の景勝をプロットする。

(2) 平面上の計測

平面上の分析では、松屋十八景に描かれている景勝の位置を地図上に記し、視点場である徳山公園を中心としてAUTOCADを用いてそこから見られていた景色の角度を測定することで詩の詠まれた順番や角度から特徴や領主の思いを考察する。作成手順は図-1の通りとなる。

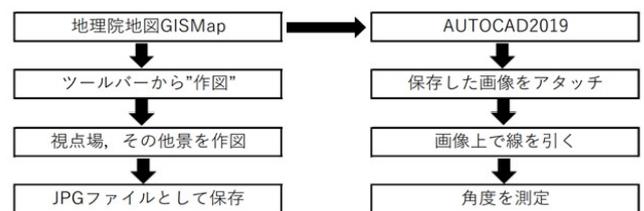


図-1 平面分析の手順

(3) 高低差の計測

断面上の分析では、詩に詠まれている景勝が、実際どのように景色として見えているのか、国土地理院地図GISMap³⁾の断面図のツールを使用し、可視化することでどのような景色・背景を詠んでいたのかを考察する。作成手順は図-2の通りとなる。

その際、視点場からの俯角、仰角を算出し、考察する。



図-2 断面分析手順

(4) 3次元化の試み

3次元化としての試みとしては、国土地理院地図GISMap³⁾の3次元表示機能を利用して動画を作成する。地理院地図で松屋十八景が観える範囲を設定し、3次元化する。その後、実際に観られる景色を動画として再現を試みる。作成手順は図-3の通りとなる。

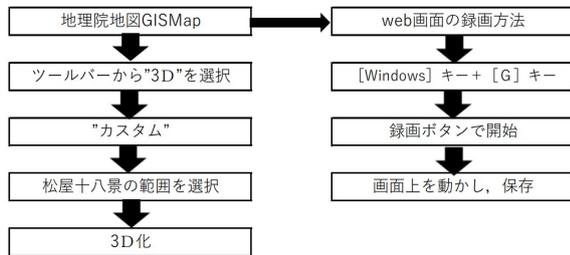


図-3 3次元マップ化の手順

2. 「松屋十八景」の平面上の配置^{註1)}

2.1 季節に分類される配列の特徴

季節に分類される配列の中で直線上に詠まれていたものは5つあり、詩と地図を比較してみるとどれも直線上を基準に視線が前後していることがわかった。直線上に配列されたものは季節と季節の境目にある。

表-1 松屋十八景詩 前半

季節に分類	角度
① 城山茂陰→②浜松帰帆	—
② 浜松帰帆→③泉原夕照	82°
③ 泉原夕照→④興元晩鐘	53°
④ 興元晩鐘→⑤八坳淡雪	—
⑤ 八坳淡雪→⑥馬場桜花	117°
⑥ 馬場桜花→⑦当南列松	—
⑦ 当南列松→⑧大河内秋月	64°
⑧ 大河内秋月→⑨前路樵人	82°

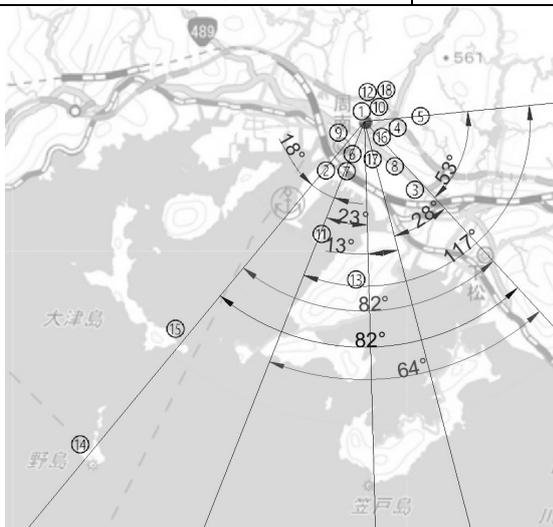


図-4 季節に分類される配列

2.2 陸と海に分類されるものの配列の特徴

また、陸と海に分類される配列の中で直線上に詠まれていたものは4つあり、詩と地図を比較してみると、季節と季節の境目であることが分かった。

季節に分類できるものと海と陸に分類できるものの中で、一定の角度で配列されていると推測できるものは、季節に分類できる方には見られ、陸と海に分類できる方には見られなかった。

季節に分類できる方は82°の範囲で観ている所が2ヶ所あり、遠近の特徴が分かった。

表-2 松屋十八景詩 後半

陸と海に分類	角度
⑩ 席上観海→⑪ 蛇島盆石	—
⑪ 蛇島盆石→⑫ 松声聞濤	—
⑫ 松声聞濤→⑬ 相島薫風	23°
⑬ 相島薫風→⑭ 野島過雨	41°
⑭ 野島過雨→⑮ 金崎漁舟	—
⑮ 金崎漁舟→⑯ 福田向崖	82°
⑯ 福田向崖→⑰ 辻村炊煙	28°
⑰ 辻村炊煙→⑱ 松屋対田	—



図-5 陸と海に分類される配列

2.3 直線上に配置されているものの特徴

直線上に詠んだと仮定しているものは、表4-3のような特徴がみられた。季節に分類される配列の中で直線上に詠まれていたものは4つあり、詩と地図を比較してみるとどれを観てもちょうど季節と季節の境目であることが分かった。一方、陸と海に分類される配列の中で直線上に詠まれていたものは5つあり、同じく詩と地図を比較してみるとどれも直線上を基準に視線が前後していることがわかった。従って前者は直線上に配列されたものは

季節と季節の境目であるのに対し、後者は遠近によって風景を観ているという特徴をもっているものとする。

表-3 直線上に詠まれた風景のまとめ (抜粋)

季節に分類		
①城山茂陰→②浜崎帰帆		(松屋) 春
④興元晩鐘→⑤八坳淡雪		秋→冬
⑥馬場桜花→⑦当南列松		春→夏
⑦当南列松→⑧大河内秋月		秋→夏

3. 対象物からの高低差にみる特徴

3.1 視点場からの高さや方向の特徴

一直線に景色を観ていると仮定し、配列したものの中で④興元晩鐘を除いて断面上の分析の結果は、以下の図のようになった。

⑩-⑭の景を観ている断面図から視点場である城山があったと推測できる徳山公園の標高は他の景物と比べてみても高さが低いことが分かる (図-6)。

そのため、全体の景として断面図に起こしてみたところ、あまり俯角を生じていなかった。当時の人間の生活域の高さや、お城の高さを考慮してみても、松屋十八景の風景はほぼ観測者の視線に見えていたのではないかと推測される。

(1) 俯角を伴うもの

視点場から見下ろすものは、城下町の景観である。⑥馬場桜花、⑦当南列松など、城下町を見下ろしていた。俯角は 8° に過ぎない。



図-5 ⑩視点場-⑥馬場-⑪蛇島の断面

(2) 同程度の高さにあるもの

一直線上に並ぶ瀬戸の島々は、視点場との標高差がなく、⑮金崎、⑭野島は、現在も見通せている。

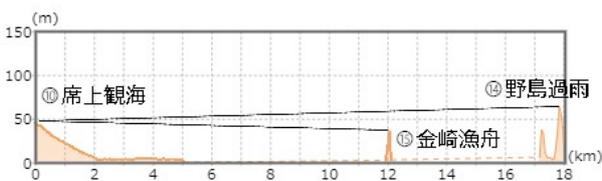


図-6 ⑩視点場-⑭断野島の断面

(3) 仰角を伴うもの

視点場から仰ぎ見るものは⑬相島薫風 (太華山、標高362m) と⑤八坳淡雪の2点である。ただし、角度は前者で 3° 、後者で 7° に過ぎない。

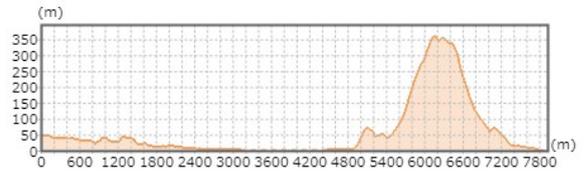


図-7 ⑩視点場-⑬相島薫風 (太華山) の断面

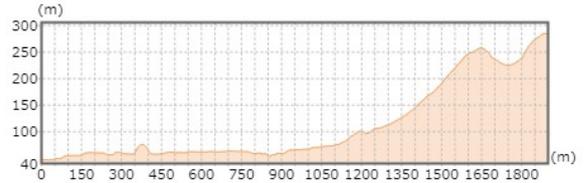


図-8 ⑩視点場-⑤八坳淡雪の断面

3.2 姿は見えずとも「音」に聞こえれば「景」

一方で、松屋十八景詩の中で④興元晩鐘を詠んだ断面図のみが異例の結果となった。断面図を見ると視点場である徳山公園と興元寺の間の標高が視点場よりも高く視点場から興元寺が見えないことが断面図からわかる (図-9)。

松屋十八景の興元晩鐘の詩から読み解いていくと、興元寺の鐘の音についての表現はあるが景観については触れられていないことが分かる。従って、④興元晩鐘のみは詩と断面上の分析から景観を観ているのではなく、視点場である徳山公園から味わうことのできる風情を詠んでいることが考えられる。当時は現代よりも静かであると仮定すると、鐘の音のみが聞こえてくることも可能であると推測する。漢詩文の解釈としては、姿は見えずとも「音」に聞こえれば「景」として成り立つため、違和感はない。

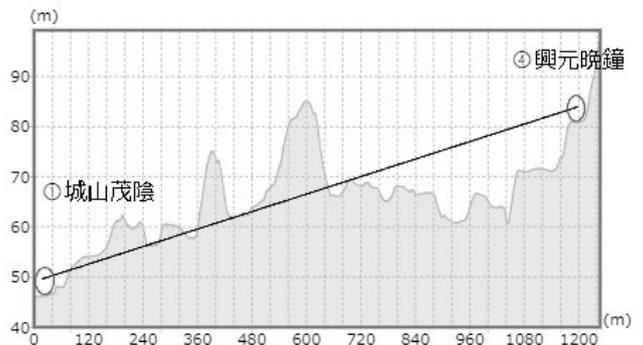


図-9 ①視点場-④興元寺の断面

断面から当時の景観が分かる例は④興元晩鐘を詠んだもの以外に⑩福田向崖を詠んだものも挙げられる。断面を見ると、視点場からさらに高い標高に福田寺があることが分かる。詩を詠むと大きな崖について触れられていることから、当時の景色と同じであることが推測できる。

4. 平面・立面の位置情報にもとづく3次元地図への展開の試み

本稿では、国土地理院地図、GISMapの3Dツールを使用して松屋十八景の景色を動画としての表現を試みた。土地の形状が分かりやすいため、実際の地を知らない人にも理解しやすい手法といえる。江戸時代当時の風景を想像しやすくなると考える。

本研究で行った手法は、遠くの風景は比較的容易に動画に表現できると感じた。その一方で視点場から近い風景は表現しにくいと感じた。

全体のスケールで3次元化を試みたところ標高にあまり差が生じなかった。従って、視点場に近い風景は場所の特定が困難となり、分かりにくくなったと考えられる。

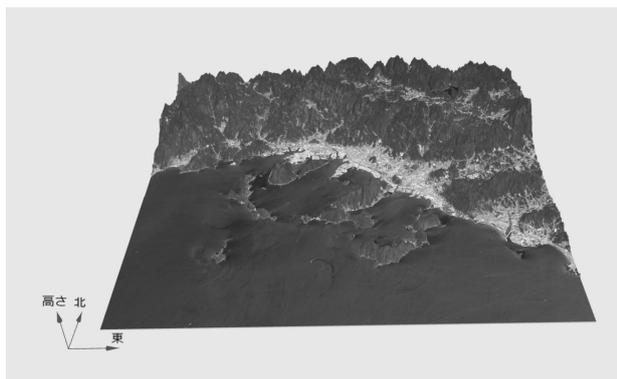


図-10 3次元化（正面）

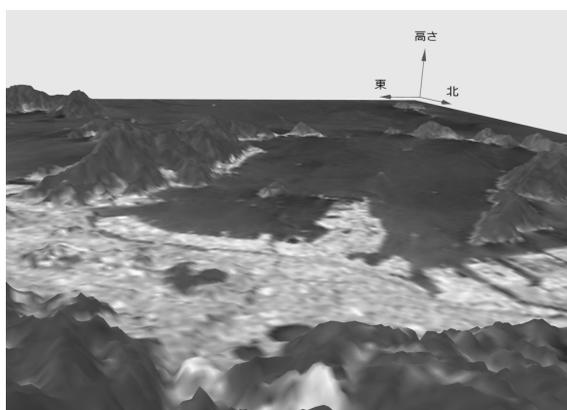


図-11 3次元化（近くの視点場）

5. まとめ

(1) 平面の角度

平面分析の結果から、松屋十八景詩で詠まれている景観範囲は南西から南東の範囲季節を追って詠まれていることが確認できた。また、角度から遠近の特徴がみられることが分かり、当時の領主がどのような景観を愛でていたのかが偲ばれる。

(2) 断面の角度

断面分析の結果から、仰角7°、俯角8°の範囲で風景を見ており、瀬戸の島々については、ほぼ同一の高さで風景を観ていることが確認できた。

(3) 方法論としての評価

今回用いた分析手法は、高度な技術を必要としないため比較的安易に行える。簡易に可視化できる点で、実用性が見込まれるとともに、今後、アプリ等への発展性が期待できる。

(4) 都市空間へ展開する手法としての評価

漢詩文に詠まれた風景を、平面的な角度および断面上の角度へ展開する試みは成果を得た。今後、DXを活用し、3次元化する手法経て発展させたい。

謝辞

本研究は、令和3年度徳山高専テクノ・アカデミア事業の助成を受けた産官学連携研究会「周南地域の偉人顕彰に関わる研究会」の成果を含むものである。とくに、周南市美術博物館学芸課長、松本久美子氏には、資料提供や解釈等の助言を得た。記して謝意を表す次第である。

参考文献

- 1) 徳山名勝（1698）：周南市立中央図書館、郷土ギャラリー「徳山名勝」松屋十八景詩 pp. 9～14、松屋十八景記 pp. 15～17
- 2) 谷本圭司（2014）：「松屋十八景記」訳注稿 徳山工業高等専門学校研究紀要第38号 pp.17～30
- 3) 地理院地図/GISMap/国土地理院 最終アクセス日 2021/12/28
https://maps.gsi.go.jp/index_m.html#12/34.029474/131.867867/&base=pale&ls=pale&disp=1&vs=c0j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1

注記1)

平面上の配置を検討する際、桂方直の「松屋十八景記」によらず、宇都宮遯庵の「松屋十八景詩」の配列に依拠した。宇都宮は、毛利元次が選んだ配列を変更している。こちらの資料に依拠するのは、その配列に法則性が見出せると考えたからである。しかし、配列には意味があり、宇都宮と領主元次の意志が反映されていたと推測される。

1* 徳山工業高等専門学校 准教授

2** 徳山工業高等専門学校 准教授

3*** 山口大学工学部3年次

1* Associate professor, Tokuyama College, NIT

2** Associate professor, Tokuyama College, NIT

3*** Student, Yamaguchi University